

話しことばの誤用分析研究

— 助詞を中心として —

迫田 久美子

(広島大学大学院)

I. はじめに

本研究の目的：この研究は長友・迫田（1987, 1988, 1989）によって行われた誤用分析の基礎研究をふまえ、新たな視点から誤用分析研究を行うものである。つまり、上記は留学生の作文と日記を対象とした書き言葉における誤用分析の研究であったが、今回は話し言葉における誤用分析を行い、学習者の日本語習得課程に関する一つの事実を明らかにしていきたいと考える。

対象及び方法：習得課程の解明を研究の焦点とする為、今回の対象を非漢字圏の初級学習者と上級学習者の二つのレベルに設定し、各レベル3人ずつ日本人との会話を録音し、そのテープの15分前後の会話内容を調査対象とした。又、学習者の誤用傾向を明確にさせる為に、参考として日本人同士の会話も録音し、比較資料とした。

各レベルに関して、初級は日本において約6か月の集中クラスを修了した学習者であり、上級は1年から1年半以上の日本語教育を受け、在日3年以上を経過している学習者である。

II. 「話し言葉」における誤用

「——話し言葉では、相手と『時』『場所』『場合』という発話場面を共有しているので『言わなくても相手に分かる了解事項』が書き言葉に比べてはるかに多い。発話の場面が伝えない部分だけを言語化すれば、表現意図は十分達せられるわけで、いきおい構文法から逸脱した省略現象が多くなるのは、当然と言えよう」（吉川千鶴子, 1988）と述べられているように、書き言葉に比べて誤用の認定は困難である。

例えば、学習者が「あーいろいろな文化あります」といった場合、書き言葉では「が」格助詞の脱落の誤用と言えるかもしれないが、親しい友人の会話では、ごく自然な文と言える。従って、これらの省略現象や場面、状況の助けから誤用であるとの認定が困難となると考えられる。又、話し言葉では、話者の心の変化、表現意図の変化と共に、言語形式が途中で変化していくので、正用か誤用かの判断は難しい。

名詞・動詞・助詞等の誤選択や動詞・形容詞の活用の誤用、そして省略できない助詞を脱落させている等、誤用認定が容易な場合もあるが、書き言葉に比べるとやはりその数量値は極めて低いと言える。

そこで本研究においては、その目的である「誤用分析を通して誤用を生み出す原因となる学習者の言語習得過程を明らかにする」から、誤用のみならず正用も含めて中間言語研究という視点で調査を行いたいと考える。今回は「助詞」を中心に取り上げ、レベル別の助詞の誤用と使用傾向を検討しながら、助詞の省略現象や質問文の機能についても考察を進めていく。

III. 助詞の分類別使用

III-1 助詞の分類 会話資料に基づいて

本研究の調査対象者14人（留学生6人、日本人8人）の会話資料の助詞を以下の分類に従って行うこととした。接続助詞「ので」「なら」「たら」「ば」等は述語との関連が強く、文型の一部としての要素が強いと考え、今回の調査項目ではとり扱わなかった。分類については、留学生のテキストである『日本語初歩』（国際交流基金）と、『日本語のシンタクスと意味1』（寺村, 1982）を参考にした。

分類の例文は、全て調査した会話資料からその正用を抽出して提示した。

格助詞

- 1 「が」 a 主語 いろいろな木があります
b 対象 若い時は、子供が好きだった
- 2 「を」 a 対象 自分で十冊本を読んだ
b 通過 西条を散歩する
- 3 「の」 私の会社は政府の機関です
- 4 「に」 a 時 3年前に日本へ来た
b 目標 外国に行きたかった
c 場所 私のうちに電話がありません
d 結果 ~言ったら、Thank you, になる
e 動作主 学生に教えてらった
- 5 「と」 a 同伴 友達といっしょに行きました
b 並列 「ごめんなさい」とすみません
c 引用 ~しなさいと言われた（「て」含）

- 6「で」 a 場所 大学で勉強しようと思った
 b 手段 できるだけ日本語で答える
 c 原因 受験で古典の勉強やっていた
 d 基準 3週間で交通費は5千円
 e 動作主 生徒は自分で授業料自分で払う
- 7「へ」 方向 瀬戸内海の島へ行った
- 8「から」 起点 幼稚園から5年生まで教えた
- 9「まで」 幼稚園から5年生まで教えた
- 10「より」 ~よりもほんとに上手になって

係助詞

- 11「は」 私は英語の教師だった
- 12「も」 a 同様 夏休みも岡山へ行きました
 b 並列 似てる所も、似てない所もある
 c 強調 30度(温度)もあがることがある
- 13「しか」 ソ連で国費留学生しかない
- 14「でも」 中国の人でも難しいところは同じ

副助詞

- 15「か」 わからない場合は誰かそれを英語
- 16「だけ」 だって飛行機ない、船だけ
- 17「ぐらい」 たしか1時間半ぐらいだと思います
- 18「ほど」 比較するほど意味にならない
- 19「ばかり」 半分ぐらい勉強、会話ばかりした

終助詞

- 20「か」 岡山で2年ぐらい勉強しますか
- 21「ね」 へー、むずかしそうですね
- 22「よ」 少しわかるんですよ
- 23「の」 同じところではたっていたの
- 24「わ」 しかたがないわねー
- その他
- 25「とか」 プラス20度とかねー、25度もある
- 26「かな」 ソ連の国費と言えるかなー
- 27「について」 受け身の表現についてなんだけど
- 28「によって」 文章作ることによって印象づける
- 29「として」 実験としてこの学校がやってみる

Ⅲ-2 助詞の分類別使用数

前項の分類に従って調査対象者の会話における助詞使用のリストを作成した。(表1参照)

表1においてA~Fは非漢字圏の日本語学習者(A~Cは初級レベル学習者-以下初級学習者とする、D~Fは上級レベル学習者-以下上級学習者とする)で、N1~N3は初級学習者の対話相手の日本人であり、N4~N6は上級学習者の対話相手の日本人で、N7とN8は母語話者同士の会話における日本人である。¹⁾

数値に関して、()内は誤用の数を示し、符号のない場合はその助詞の誤選択、(+)の場合は付加を、(-)の場合は脱落を表す。例えば、学習者Dの

『6a「で」範囲』の数値が9(1,+1)の場合、Dは会話中、『範囲を表す』「で」を9回使用し、うち1回は誤選択(例:今年の春に、あの、〇〇で木曜日で教えて…[で→に])であり、又1回は付加(例:いつも毎日一日中で英語教えたら…[で→0])を表している。又、学習者Aの『3「の」』の数値、15(-2)は「の」の脱落が2回おきたことを示す。(例:日本語(の)勉強の時もとても楽しかったです[0→の])

助詞の分布欄の数値は29の助詞のうち何種の助詞を使用しているかを表して、対話相手の日本語話者の場合と比較したものである。

この表から、まず初級学習者にも上級学習者にも助詞の誤用が見られることが分かる。長い学習や経験を経ても助詞の適切な使用の難しさが伺えるのではないだろうか。

次に誤用が現れた助詞について見ていくと、幾つかの助詞に関して、学習間で共通に誤用が見られる。格助詞「が」…学習者A(2), C(+1), F(+2) 計5回
 格助詞「の」…学習者A(-3), B(-2), C(-3) 計8回
 格助詞「は」…学習者A(1), C(-1), D(4) 計6回
 ここで注目したいのは、格助詞「の」に関しての誤用が初級学習者全てに現れ、上級学習者には現れていないこと、又その全ての誤用が脱落の誤用であることである。この点については、後の助詞の省略の項で扱うことにする。

次に助詞の分布欄を見ると、初級学習者と上級学習者では使用される助詞の種類の数に差が見られる。これは、助詞使用の合計数や発話語数に関連があると考えられる。つまり、15分の会話の分析という調査方法では話す語数が多ければ、必然的に助詞の使用数も使用種も多くなると考えられる。そこで、つぎに学習者の話した長さを各学習者で一定にして比較してみた。

Ⅲ-3 一定発話語数中の助詞の分布

会話のスクリプトから各学習者の発話語数を調べ、その中で一番発話語数の少ない学習者Bの総語数270語に合わせて、他の学習者が270語までに使用した助詞の分布表を作成した。(表2参照)

「語」は、一文節を一語として数えた。例えば、「白い/花が/咲いた」は3語とする。

この表から、初級学習者と上級学習者の助詞の分布を見ると、やはり上級学習者のほうがより多種の助詞を使用して発話していることが分かる。この表から、初級学習者には使用されていないで、上級学習者に使用されている助詞を挙げてみると以下の通りである。

- 4「に」d 結果 4「に」e 動作主 6「で」c 原因 6「で」e 動作主* 10「より」 12「も」c 強調*

表1 助詞の分類別使用数

	A	N1	B	N2	C	N3	D	N4	E	N5	F	N6	N7	N8
1a 「が」主語	8(2)	23	2	8	3(+1)	13	11	3	32	11	20(2)	27	13	61
b 対象					2	2	1	1				1		
2a 「を」対象		7	5	8	9	2	3	8	5	3	7(0)	6	10	48
b 通過		1												
3 「の」	26(-3)	39	12(-2)	23	23(-3)	10	39	16	32	14	16	35	24	81
4a 「に」時		2	5	2	2	4	1	3	3	2	3(0)	2	1	7
b 目標	4(0,-1)	4		1	3		6	4	1(0)	3	11	6	6	21
c 場所	4	4		1	1	1	1	4	4	1	4	19	2	4
d 結果		3		1	1	1	3(0)	2	2	2	5	1	2	6
e 動作主							1		1			1	1	2
5a 「と」同様	8(-1)	5	1	3	1	1	2	1	5	2	2	6	3	3
b 並列	2	2	4(2)	1	1	2	20(9)	3	3	5	5	9	3	14
c 引用	3	1	3	3	1	1	8	2	10	4	14	26	21	61
6a 「で」場所	5	15	2	7	6(2)	5	4	5	4	5	4	1	5	13
b 手段	1	1		2	2	6	1	1	1	3	13	5	2	7
c 原因	1	1								1	1	1	1	3
d 基原	2			1		1	5	5		1	1	1	2	1
e 動作主							7	5		1	1	2	1	3
7 「へ」	4	6		2	1	7	1	5	1	4		1	1	3
8 「から」	5	4	3	3	10	2	7	2	12	14		1	1	2
9 「まで」	1	1	4	1			1		3	2	2	1	1	3
10 「より」							2		2			1		1
11 「は」	41(0)	32	10	15	27(-1)	17	51(4)	19	64	15	41	30	23	61
12a 「も」同様	4(0)	10	3	3	3	2	6		11	4	11	6	1	6
b 並列	2								2	2	2	2	2	2
c 強調							3(2)		2	2	2	1	2	2
13 「しか」								1	2(+1)					
14 「でも」							2	2		2	9(0)	3	2	4
15 「か」							2	11		4	4	2	1	14
16 「だけ」							5	2	4	1	10	2	1	3
17 「ぐらい」	3	5	2	2	4	5	5	2	4	5		1	1	1
18 「ほど」	3	3	1	3			9	3	5			1		1
19 「ばかり」							2		1					
20 「か」	4	32	1	27	26	7	1	7	1	9	8	9	4	2
21 「ね」	7	28	2	21	5	12	2	13	37	20	17	68	19	69
22 「よ」	3	1	1	1	1	1	1	3	7	4	6	6	12	12
23 「の」	14			2			15	15	9	9	11	3	12	12
24 「わ」										1				
25 「とか」	1	2	1	4		1	10	1	11	6	7	10	10	30
26 「かな」				3		1	1	1	1	1	2	7	2	9
27 「について」											1	1	1	3
28 「によって」									1			1	1	1
29 「として」									2			3	2	2
合計	182	254	60	144	119	97	228	127	280	148	218	309	167	575
(総語数)	(6,-5)		(2,-2)		(3,-4,+1)		(17,+2)		(1,+1)	(5)				
助詞の分布	18:27		18:23		17:21		30:25		31:27		26:33		28:35	

表2 一定発話語数中の助詞の分布

	A	B	C	D	E	F	N7	N8
1a 「が」主語	6(2)	2	2(+1)	8	16	7(2)	13	14
b 対象			2	0				
2a 「を」対象		5	8	2	4	7(0)	10	9
b 通過								
3 「の」	15(-2)	12(-2)	21(-3)	22	17	6	21	16
4a 「に」時		5	2	1	2	3(0)	1	2
b 目標	4(0,-1)		3	2	0	6	6	3
c 場所	2			1	1	2	2	1
d 結果				1	2	3	1	3
e 動作主					1			0
5a 「と」同様	7(-1)	1		2	1	1	3	3
b 並列	4(2)	4(2)	1	9(6)	2	2	3	6
c 引用	1	1		5	2	11	18	15
6a 「で」場所	4	2	5(2)	9(0,+1)	3	2	5	6
b 手段	1		2	1	0	5	2	0
c 原因						1	1	0
d 基原				0			1	1
e 動作主				5	1	1	1	0
7 「へ」	4		0	1	1			0
8 「から」	5	3	1(0)	6	6		1	0
9 「まで」		4		1	0	2		1
10 「より」					2			
11 「は」	26(0)	10	26(-1)	26(0)	26	28	21	22
12a 「も」同様	4(0)	3	3	2	3	3	1	4
b 並列	2				0	1		0
c 強調				3(2)	0	1		1
13 「しか」					1(+1)			
14 「でも」				1		2(0)	2	1
15 「か」				0	6		1	5
16 「だけ」		2	3	3	2	6	1	0
17 「ぐらい」		1		3	4			1
18 「ほど」								1
19 「ばかり」				2	1			
20 「か」	4	1	25	0	0	3	4	0
21 「ね」	5	2	5	0	15	12	17	10
22 「よ」		1	1	0	2			1
23 「の」							3	2
24 「わ」				3	3			
25 「とか」	1	1			3	2	8	3
26 「かな」					0	2	2	5
27 「について」					1	1	1	1
28 「によって」							0	0
29 「として」					2		3	1
合計	95(6,4)	60(2,-2)	110(3,-4,+1)	119(0,+1)	123(+1)	120(5)	150	139
(総語数)	(377)	(270)	1) (292)	(549)	(654)	(516)	(295)	(1028)
助詞の分布	17種	18種	16種	23種	25種	26種	27種	26種

13「しか」 14「でも」 15「か」(副助詞) 19「ばかり」
 26「かな」 27「について」* 28「によって」*
 29「として」*

(*のついた助詞は『日本語初歩』に登場しない)

Ⅲ-4 助詞使用の割合の比較

次に、どの助詞の使用頻度が高いか、レベル別に差が見られるかどうかを見る為に、初級学習者と上級学

表3 レベル別助詞使用の割合

	(%) 初級平均	(%) 上級平均	(%) 母語平均
1 a 「が」	4.0	8.5	9.2
b 主語	0.6	0.1	0
2 a 「を」	5.3	2.1	7.2
3 「の」	19.6	11.9	14.3
4 a 「に」	3.3	1.0	0.9
b 時	1.9	2.7	3.7
c 目標	1.0	0.6	1.0
d 場所	0	1.4	1.1
e 結果	0	0.1	0.2
5 a 「と」	2.6	1.2	0.3
b 同	3.0	3.7	2.1
c 並列	0.6	4.5	11.6
6 a 「で」	4.0	2.3	2.7
b 場所	0.8	3.6	1.2
c 手段	0	0.2	0.6
d 原因	0	0.7	0.6
e 基準	0	1.2	0.3
7 「へ」	1.8	0.3	0.3
8 「から」	3.2	2.5	0.3
9 「まで」	2.2	0.8	0.3
10 「より」	0	0.2	0
11 「は」	23.5	21.4	12.2
12 a 「も」	3.5	3.8	0.8
b 同	0.5	0.5	0.2
c 並列	0	1.0	0.2
13 「しか」	0	0.2	0
14 「でも」	0	1.7	1.0
15 「か」	0	2.2	1.5
16 「だけ」	3.0	2.7	0.6
17 「ぐらい」	1.3	1.9	0.1
18 「ほど」	0	0	0.1
19 「ばかり」	0	0.4	0
20 「か」	8.8	1.5	1.4
21 「ね」	5.0	7.3	11.7
22 「よ」	0.8	1.0	1.1
23 「の」	0	0	2.0
25 「とか」	0.8	3.8	5.6
26 「かな」	0	0.4	1.4
27 「について」	0	0.2	0.6
28 「によって」	0	0.1	0.3
29 「として」	0	0.2	1.1

習者及び日本語話者の助詞の使用の割合について調べて見た。方法としては、表1を基に各学習者の助詞使用総数を100%として、各助詞の割合を出し、各レベルを合計してその平均を求めた。(表3 参照) 又、その数値をグラフにしたものが図1である。

格助詞「の」や係助詞「は」はどのレベルでも使用頻度が高いことがわかる。上級学習者や母語話者に比べて、初級学習者に高い割合で見られるのは、終助詞「か」と係助詞「は」で、反対に低いのは格助詞「が」、引用「と」、終助詞「ね」と「とか」である。

被験者の数に限りがあり、この図だけで判断することはできないが、引用「と」は、「と言う」や「思う」等の表現で、上級学習者や母語話者にはしばしば使用されるが、複文の構成となり、初級学習者には使用されにくいようである。

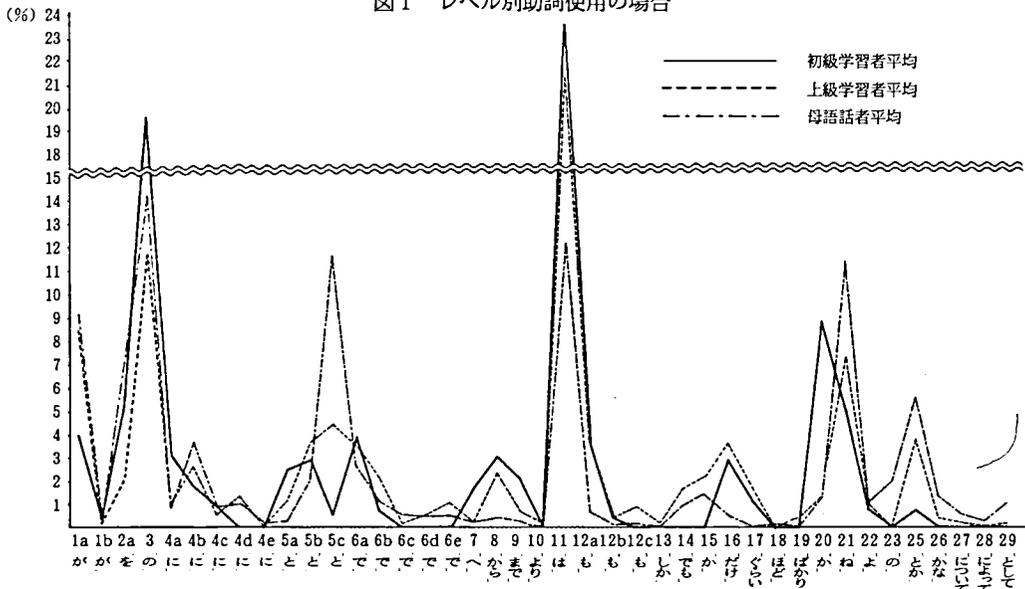
終助詞「ね」について神尾氏(1990)は「話し手と聞き手の各々の持つ情報が同一であることを示す、必須の標識である」と述べている。このように、「ね」は談話の性格や文脈と深く関わっているため、初級学習者にとっては使用が困難であろうと予測される。

反対に初級学習者に多用されているのは、終助詞「か」が挙げられるが、これについては後の終助詞と質問文の項で検討したい。

Ⅳ. 助詞の省略

Ⅲ-2 助詞の分類別使用数で見た、初級学習者に現れた格助「の」の脱落とその他の助詞の省略現象について考えてみたい。筒井氏(1984)は「話し言葉においてある種の助詞がしばしば省略されることはよく知

図1 レベル別助詞使用の場合



られている事実である。…これ（助詞の省略）が行われないと会話は全く極めて不自然なものになる」と、話し言葉における助詞省略の重要性を述べている。

表4は、各発話から省略されていると思われる助詞を考え、その数を調べたものである。イは省略した助詞の数、ロは助詞の総数、イを（イ+ロ）で割った値を省略率とした。

この表を見ると、どの話者も助詞の省略現象が見られ、話し言葉の特徴が見られる。特に省略の頻度の高い助詞は「は」「が」「を」である。しかし、筒井氏も述べているように、全ての助詞が省略可能ではなく、一般的に「は」「が」「を」と一部の「に」「へ」が省略されやすいようである。(丹羽, 1990)

本研究の会話においては、「も」と「と」の省略が見られた。(方言とも考えられるが、この使用の正当性について、今回は言及しない)

注目したいのは、助詞省略の明らかな誤用が初級学習者に見られることである。以下は省略の誤用例である。

- A: 日本語 (の) 勉強の時もとても…
 A: 全部 (の) ところ…
 A: ブラウンさん (の) ところ…
 A: 妻は、ブラウンさんのところ (と) 同じ
 A: 午後11時ぐらい (に) 会いました
 B: 電話 (の) ときに—
 B: あの—、発表 (の) ときに
 C: それから、あ—かかり (の) 人は、(同例他1)
 C: これはへいわ (の) とき、に…
 C: あそこで (は) 何をしていますか (対照の「は」)
- これらの誤用については、英語をそのまま訳した為、

表4 助詞の省略

	「は」	「が」	「を」	「に」	「へ」	「も」	「と」	引	イ/ロ	イ(イ+ロ) 省略率
A	2	2	4	2(1)				3	14/ 132	9.6%
N1	3	1	4	2					10/ 254	3.8
B	6	4	4					2	16/ 60	21.1
N2	2	2	4	1	1				10/ 144	6.5
C	8(1)	3						3	14/ 119	10.5
N3	8	7	6	1					22/ 97	18.5
D	8	9	5	3					25/ 228	9.9
N4	1	1	5						7/ 127	5.2
E	7	5	7	1	2	1			23/ 280	7.6
N5	2	2	5	3	1	1			14/ 148	8.6
F	8	4	8						20/ 218	8.4
N6	2	4	4						10/ 309	3.1
N7	2	1	2						5/ 167	2.9
N8	5	4	9	1					19/ 575	3.2
	64	49	67	14	4	1	1	8	209/2858	6.6

注) ① 下線の数値は誤用における省略例の数値を表している
 ② 「も」と「と」(引用)の省略例
 1) E: だから、これ— (は)、わからない、問題もあるね—、初めてだから、問題 (も) ある
 2) N5: ウラジオストック (と) いうたら、もうソ連の端っこのほうじゃない?

(例: 日本語 (の) 勉強…Japanese study) とも考えられるが、助詞省略を他の助詞に拡大して適用した過剰一般化とも考えられるかもしれない。この点については今後多くの学習者を対象として、より詳しい調査で検討したいと考える。

V. 終助詞「か」と質問文

Ⅲ-4の助詞使用の割合の比較で、終助詞「か」は初級学習者にその使用頻度が高いという結果が出た。そこで、ここでは終助詞「か」に関する考察を加えたいと考える。表5は対話の中で「か/の」による質問文とそれ以外の形式の質問文がどの程度なされているかを調べたものである。「そうですか」の場合は、特に返答を必要とするものではなく、あいづちに近い機能を持っているのであいづちとして、除外して分類した。

入谷氏(1988)は「話しことば」は一定の構造を持つと述べ、会話・対話の場合、相手の発話に則した応答形式があって、それが会話を成立させているとしている。このことから、一つの応答形式の切りだしとしての質問文がだれによって、どのような形式で行われているか、又その機能についても考えてみたい。

初級学習者の会話内容ではA-N1, B-N2の場合、日本人が答えるというパターンが多く、表5の数値にもそれが表されている。しかし、C-N3の場合は、Cがインタビューの依頼者である為、逆にCが質問してN3が答えるという構造になっている。

上級学習者の場合、インタビュー依頼者が母語話者である為、質問数はやはり日本人の方が多いが、質問する側、つまり応答形式の切りだしを行う側が「か/の」の定形質問文を使用するか、それ以外の形式を使うかには少し差が見られるようである。質問する側は、初級学習者では「か/の」の定形質問文を使う傾向があり、上級学習者になると、「か/の」以外の形式の質

表5 質問文の割合

	か/の 質問文	以外の 質問文	合計	そうですか (あいづち)
A	1	2	2	2
N1	32	26	58	4
B	1	7	9	0
N2	20	20	40	11
C	16	7	23	10
N3	6	3	9	2
D	1	12	13	0
N4	12	23	35	3
E	0	8	8	0
N5	9	27	36	5
F	4	14	17	0
N6	5	29	34	3
N7	3	14	17	2
N8	0	19	19	1

問によって会話がすすんでいくようである。

「か／の」以外の質問文という場合、主に上昇イントネーションによる質問文や問いかけが考えられる。しかし、その機能には自然な会話の進行に重要な役割を果たすコミュニケーションストラテジーやインターアクションが含まれているようである。そこで、「か／の」以外の質問文の例で、単純な質問ではなく、対話相手に何らかのインターアクションを求めようとする為に使用されたと判断される場合を以下の通りに分類した。²⁾

—学習者の「か／の」以外の質問文例の分類—

1 言ってみる

- 1-1 A: 毎どころ? (every place の訳)
1-2 D: じゅ…っぼん? じゅっぶん? (十冊のこと)
(他に B-1 例, F-2 例)

2 相手の発話の繰り返し

- 2-1 N3: プールないですね。
C: プールない?
(他に B-2 例, C-4 例, D-4 例, E-4 例)

3 言い直し (再構成)

- 3-1 E: この勉強をみんなに伝えようということ?
(他に E-2 例)

4 同意要請

- 4-1 D: (学生は) 自分で授業料払わないでしょ?
(他に D-4 例, E-2 例, F-2 例)

5 聞き返し

- 5-1 N2: フィリピンの フィリピンの住所も…
B: なに?

これらの質問文は、あいづち等と同様、対話の展開に大きな誘発力として働く「話しことばの信号性、合図性」(入谷, 1988) の機能を持っているように思われる。そして、繰り返し等は初級学習者にも見られるが、言い直しや同意要請などは上級学習者のみで見られる形式であった。終助詞を使わない質問文も様々な機能を持って、会話で使用されているようである。

VI まとめ

本研究は、日本語の初級学習者、上級学習者の日本人との会話資料を基に、日本人同士の会話資料も加えて、助詞を中心として話しことばの誤用分析を行い、まとめたものである。この研究は、学習者の習得過程の解明という中間言語研究の立場をとり、誤用のみならず正用も含め、助詞の使用傾向や分布及び、各助詞の使用割合を調査した。

その結果をもとに、初級学習者の助詞脱落の誤用と助詞の省略現象の関連性を探ってみた。

又、質問文の形式を終助詞「か／の」の付く場合とそ

うでない場合に分け、後者の場合の会話における機能を分類した。

話しことばの誤用分析の研究は、先行研究の例も少なく未開拓の分野であると言える。今回の研究では取り上げることが出来なかった述語の傾向や文型の傾向等についても、今後の課題としてさらに会話資料を増やして研究を続けたいと考える。

注

- 1) 会話資料の日本語学習者の国籍は以下の通りである
- | | | | |
|---|---------|-----|--------------|
| A | インドネシア | (男) | 来日前の学習経験無し |
| B | フィリピン | (女) | 同 |
| C | ケニア | (男) | 同 |
| D | アメリカ | (男) | 学習2年, 来日3年経過 |
| E | ソ連 | (女) | 学習4年, 来日2年経過 |
| F | バングラデシュ | (男) | 学習2年, 来日5年経過 |
- 2) これは質問文をコミュニケーション・ストラテジーの視点で便宜的に分類したものであり、コミュニケーション・ストラテジーの分類とは異なる。参考として、R. Ellis (1985) を用いた。

<参考文献>

- 小篠敏明『英語の誤答分析』大修館 (1983)
寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版 (1982)
水谷修 『話しことばの表現』筑摩書房 (1979)
水谷信子『話しことばの比較対照』監修 国立国語研究所『話しことばとコミュニケーション』凡人社 (1988)
神尾昭雄『情報のなわ張り理論』大修館 (1990)
長友和彦, 迫田久美子「誤用分析の基礎研究(1)」『教育学研究紀要』33巻中国四国教育学会 (1987)
———, ———, 「誤用分析の基礎研究(2)」『教育学研究紀要』34巻中国四国教育学会 (1988)
———, ———, 「誤用分析の基礎研究(3)」『教育学研究紀要』35巻中国四国教育学会 (1989)
吉川千鶴子「場面のスクリプトと省略現象」『日本語学』vol. 7, 3月号, 明治書院 (1988)
入谷敏男「私の話しことば観」『日本語学』vol. 7, 3月号, (1988)
筒井通雄「「ハ」の省略」『言語』vol. 5, 大修館 (1984)
丹羽哲也「無助詞格の機能」『国語国文』vol. 58, 第10号中央図書出版 (1990)
Ellis, R., Understanding Second Language Acquisition, Oxford University Press, 1985.